

宮川です。普段は群馬県の公立高校で世界史の授業を担当しています。音楽の専門家ではありませんが、ワーグナーの作品は実演で100回以上体験していますので、少しでもワーグナーについてお話しさせて頂ければと思います。大きく分けて3つのテーマでお話しさせていただきます。最初に「ワーグナーと歴史」について、2つ目に「ワーグナーの特異性や音楽史上の功績」について、3つ目に今回我々が演奏する『ニーベルングの指環』についてです。

まずは、「ワーグナーと歴史」についてです。ワーグナーと歴史の関係を、3つの年に注目して説明させていただきます。

まずは1813年です。

同年、ワーグナーがドイツのライプツィヒで生まれています。これはなかなか象徴的なことです。1813年ライプツィヒといえば、ロシア遠征に失敗したナポレオンが連合軍に敗れた諸国民戦争が行われた場所であり、年です。まるでヨーロッパの主役がナポレオンからワーグナーに交代するかのよう、ワーグナーが誕生したのです。因みに、ご存じの方も多いかもかもしれませんが、アルプスの南、イタリアでは同年ジュゼッペ・ヴェルディが生まれています。ともに国家統一されていないドイツとイタリア、両国に2人の天才が同年に誕生するとは運命のいたずらなんでしょうか。

その後、ヨーロッパはフランス革命によって生まれ、ナポレオンの征服活動によってヨーロッパ全域に広まった「自由・平等・博愛」の精神を否定する、ウィーン体制の時代に入ります。しかし、我々がもはや電気やスマホがない生活に戻れないように、「自由・平等」を知らない生活に戻ることにはできないのです。「自由・平等」を求める民衆とそれを弾圧する為政者という対立構造の中、ワーグナーは青年時代を送ることになります。

次に1848～49年です。

様々な挫折や苦労を経験したワーグナーですが、歌劇『リエンツィ』の成功により、1843年ドレスデンにあるザクセン宮廷歌劇場の音楽監督の地位を得ることができました。ここで現在でも頻繁に上演される『さまよえるオランダ人』『タンホイザー』を初演しました。大成功とは言えませんが、安定した定職を得て、ようやく大作曲家への一歩を踏み出したかに見えました。

しかし、1848年フランスで発生した二月革命を機にヨーロッパは再び革命の嵐が吹き荒れました。ウィーン体制の中心人物だったオーストリア首相メッテルニヒの亡命により保守反動のウィーン体制も崩壊、革命の波はザクセンにも及びました。宮廷歌劇場の音楽監督の地位にあるワーグナーが革命に参加する訳がありませんよね。

しかし、ワーグナーは革命に参加してしまうんですね。ワーグナーは、作曲家としてだけでなく様々な政治的な論文も発表していますが、さてその政治感覚はどうだったのでしょうか。1849年

の革命に参加したワーグナーの主張は、「王を戴く共和政」という極めて胡散臭いものでした。王政や帝政の対立概念が共和政ですので、論理が破綻しています。これにより当然宮廷歌劇場の音楽監督の地位を失い、それどころか、現代風に言えば指名手配者になってしまったのです。ワーグナーの長い亡命生活が始まります。

今回、我々が演奏する序夜と三日間の舞台祝祭劇『ニーベルングの指環』の台本作成と作曲は、この亡命時代に始まりました。ご存じの方も多いかと思いますが、台本は作品とは逆で『神々の黄昏』『ジークフリート』『ワルキューレ』『ラインの黄金』の順に作成され、作曲は『ラインの黄金』から行いました。しかし上演に4夜を要し、巨大なオーケストラを必要とする『ニーベルングの指環』を上演する見込みが立たないワーグナーは、『ジークフリート』2幕途中で作曲を中断、もっと簡単に上演する作品をとということで作曲したのが『トリスタンとイゾルデ』『ニュルンベルクのマイスタージンガー』です。

しかし、簡単に上演できる作品として書いたのがこの2つの作品というのが、さすがワーグナーですね。どちらの作品も休憩含めると上演時間5時間超え、『トリスタンとイゾルデ』は主役2人に尋常ではないパワーと持久力を必要としますし、『マイスタージンガー』は大規模な舞台装置や大合唱団を必要とする大作中の大作となりました。

次にワーグナーの転機となったのが1864年です。

この年、18歳でバイエルン国王となったのが、ルートヴィヒ2世です。15歳で初めて『ローエングリン』を体験したルートヴィヒ2世は、すっかりワーグナーに傾倒、国王即位後最初の命令が「ワーグナーを探してここに連れて参れ」だったと言われています。お尋ね者で亡命中だったワーグナーがルートヴィヒ2世の御前に連れてこられた際、臣下の礼をとったのはルートヴィヒ2世だったと言われています。

この出会いにより、不可能と考えていた『ニーベルングの指環』上演が現実味を帯びてきました。しかし、ワーグナーの借金を肩代わりしたり、王侯のような生活を送るワーグナーに対する金銭援助など、あまりの傾倒ぶりに周囲からの反対に会い、『ニーベルングの指環』を上演するために専用の劇場をミュンヘンに建てるという前代未聞の計画は頓挫しました。

専用劇場での4作一挙上演にこだわるワーグナーに対して、4作完成を待ちきれないルートヴィヒ2世は、ミュンヘンの宮廷歌劇場で序夜『ラインの黄金』と第一夜『ワルキューレ』を初演してしまいました。これを機に、ルートヴィヒ2世の専用劇場での『ニーベルングの指環』上演に対する夢は、作曲家同様のものとなったのです。ミュンヘンではワーグナー反対者の目が厳しいことから選ばれた場所が、バイエルン王国内のフランケン地方の小都市バイロイトでした。ここであればバイエルン国内ですのでルートヴィヒ2世の経済援助などの影響力も期待できますし、何よりも小都市ですので『ニーベルングの指環』観劇に集中して欲しいワーグナーの希望にも完全に合致しています。

こうして、ワーグナーの『ニーベルングの指環』だけを上演する目的でバイロイト祝祭劇場が建てられ、1876年4部作同時上演により第1回バイロイト音楽祭が開催されました。第二夜『ジークフリート』

クフリート』と第三夜『神々の黄昏』は世界初演となります。

芸術的にも興行的にも失敗とされる第1回バイロイト音楽祭、ワーグナーが祝祭終了後は劇場を燃やしてしまうつもりだったらしいのですが、その後1882年に第2回バイロイト音楽祭が開催され、舞台神聖祝祭劇『パルジファル』が初演されました。翌1883年、ワーグナーはヴェネツィア滞在中に逝去しましたので、ワーグナー存命中のバイロイト音楽祭は2回、劇場の音響効果を意識して作曲した作品は『パルジファル』のみとなってしまいました。

因みに、ワーグナーが『ジークフリート』を完成させた1871年2月、プロイセン・フランス戦争の勝利を受けヴェルサイユ宮殿でプロイセン国王ヴィルヘルム1世の戴冠式が行われ、ドイツ帝国が成立、ドイツは統一されました。プロイセン王国のビスマルク首相主導の武力による統一でした。一方、ワーグナー最大の恩人であるバイエルン国王ルートヴィヒ2世は、有名なノイシュヴァンシュタイン城などの城作りに熱中、ワーグナー死去後はその影響もあったのか、奇行が目立つようになり、1886年には国王を強制退位となり、退位翌日グッデン医師と共にシュタルンベルク湖で水死体で発見されました。当時は自殺と判定されたようですが、どうなのでしょう？

次に、ワーグナーが音楽史上特異な点や功績などについて、お話しさせていただきます。

まずは、ドイツオペラというジャンルを成立させたことです。

今でこそイタリアオペラと人気を二分するドイツオペラですが、ワーグナー以前にはドイツオペラというジャンルは存在していないも同然の状況でした。

モーツァルトの『フィガロの結婚』や『ドン・ジョバンニ』があるじゃないか、という声もあるかもしれませんが、どちらの作品もイタリア語歌唱のオペラですので、ドイツオペラではないですね。では『魔笛』は、『魔笛』はドイツ語歌唱だろう、という意見もあるでしょうが、この作品はオペラではなくジングシュピール、ジングは歌、シュピールは劇や芝居のことですので、歌芝居というところでしょうか？今でこそ『魔笛』はオペラハウスで上演されていますし、むしろ超人気作品ですが、厳密にはオペラではありません。少なくとも、モーツァルト自身はオペラだと思って作曲していないはずですよ。

ということで、ワーグナー以前のドイツオペラと言えるのはベートーヴェンとウェーバーのみ、ベートーヴェンは『フィデリオ』一作のみですし、ウェーバーも当時はともかく現在上演される機会があるのは事実上『魔弾の射手』のみです。これではとてもじゃないですが、イタリアオペラに対抗できませんよね。やはりドイツオペラはワーグナーによって確立した、と言っても過言ではないでしょう。ワーグナーがいたからこそ、リヒャルト・シュトラウスが登場し、『サロメ』や『ばらの騎士』、『ナクソス島のアリアドネ』、『影のない女』などの素晴らしい作品が誕生したのです。

次に、自らの作品だけを上演する目的で劇場を建てたことでしょうか。

さきほども説明しました、バイロイト祝祭劇場です。ワーグナーの死後、一族によってバイロイト

音楽祭は継続、第二次世界大戦でも劇場は奇跡的に破壊を逃れ、毎年夏季1ヶ月間だけ、『さまよえるオランダ人』以降のワーグナー作品だけを上演しています。

私は、幸いなことに、パイロイト祝祭劇場で1998年に『ニーベルングの指環』、2001年にも『ニーベルングの指環』、2005年には『さまよえるオランダ人』『タンホイザー』『ローエングリン』『トリスタンとイゾルデ』『パルジファル』を経験することができました。

この劇場で体験するワーグナーはやはり特別です。特に暗闇、パイロイト祝祭劇場はオーケストラピットが舞台下に隠れていますので他の劇場よりも明らかに暗いのですが、この暗闇から響いてくる『ラインの黄金』の冒頭、今回我々が演奏しますが、最初のホルンの変ホ音がかすかに聞こえ、次第に弦楽器がライン川の流れを描いていく前奏曲の効果は本当に格別でした。また、『パルジファル』前奏曲冒頭の不思議なサウンドも、不謹慎な言い方かもしれませんが、新興宗教の宗教儀式に参加しているような錯覚を感じさせるような特別な雰囲気がありました。

一方、やはりオケピットに蓋がされていますので音量的にはやや物足りなさもありますが、それを補うのが床の振動です。『ニーベルングの指環』はティンパニが2セットありますので、ティンパニを強打すると木造建築の祝祭劇場の床が振動するんですね。

カーテンコールも独特で、拍手とブラーヴォのかけ声だけでなく、床を一斉に踏みならします。これがまた凄い迫力なんですね。ブーイングも凄まじく、『トリスタンとイゾルデ』を指揮した大植英次と、『パルジファル』の演出家には私の人生最大級の凄まじいブーイングが飛び交いました。一方、『パルジファル』を指揮したピエール・ブーレーズが登場したときは観客が一斉に立ち上がるこれもまた初体験のスタンディングオベーションでした。

『ニーベルングの指環』について、いくつかお話しさせていただきます。

まずは台本についてです。

オペラを制作するにあたり、通常は台本作家と作曲家の協同作業で制作していきます。モーツァルトだったらロレンツォ・ダ・ポンテ、ヴェルディだったらアリゴ・ボイドですね。しかし、ワーグナーは台本も自ら制作しました。この『ニーベルングの指環』ももちろんワーグナー自身が台本を作成しています。大雑把に言って、前半は北欧神話の『エッダ』『サガ』、後半はドイツに伝わる作者不詳の中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』を基にしています。『ニーベルンゲンの歌』はもしかするとお読みになった方もいらっしゃるかもしれませんね。紙や印刷技術などが無い時代、吟遊詩人の語りによって伝えられたため、様々なバージョンがあります。例えば、なぜジークフリートが不死身になった、そしてなぜ背中が唯一のウィークポイントになったのか、最も一般的なのが森で大蛇を退治した際、全身に大蛇の血を浴びたことで不死身になったのですが、背中に葉っぱが一枚乗っていたため、そこがウィークポイントになった、というものです。これがワーグナーの『ニーベルングの指環』では、ブリュンヒルデが魔術をかけてジークフリートを不死身にしますが、ジークフリートは絶対に敵に背を向けない、という理由で背中には魔術をかけなかったため背中がウィークポイントになるんですね。ワーグナー好きの私には、やはりこっちの方がいいですね。

次は、世間で誤解されている点についてです。

どのような誤解かというと、「ワーグナー＝音量がでかい・やかましい」ということです。これは絶対に誤りだと思います。確かに今回我々が演奏するのは、オーケストラが活躍する場面ですのでどうしても音量は大きめになってしまいますが、『ニーベルングの指環』は決して大音響で圧倒する作品ではない、と思います。打楽器の使用なども禁欲的と言ってもいいほどですし、これだけ長い作品なのに合唱の出番は最後の『神々の黄昏』だけ、それもかなり限定的です。他の作品を見ても、官能的な愛をテーマとした『トリスタンとイゾルデ』、ハーブなどが大活躍しそうですが、ここぞ、という部分にしか使用していません。

最後に、ライトモチーフについてです。

日本語では「示導動機」と訳されますが、これを縦横無尽に駆使することで、巨大な『ニーベルングの指環』が成り立っているのです。重要なライトモチーフをいくつか覚えてしまえば、ドイツ語がわからなくても大抵の内容は理解できるようになっています。今回我々が演奏する部分にはその重要なテーマが総動員されています。

登場頻度が高く、また印象に残るライトモチーフは、「槍」「剣＝ノートゥング」「ジークフリート」の3つでしょうか。「剣＝ノートゥング」ですが、『ラインの黄金』には登場しませんが、次回の予告のように最後の場面で金管楽器によってffで吹き鳴らされ、非常に印象的です。同様に「ジークフリート」はもちろん『ワルキューレ』には登場しない人物です。『ワルキューレ』3幕の最後、主神ヴォータンに逆らった罰でブリュンヒルデは神性を剥奪され炎に包まれた山頂に眠らされます。そこでヴォータンは“私の槍の先を恐れるものは、この炎を決して越してはならぬ”と歌い幕となるのですが、ここで「ジークフリート」のライトモチーフが盛大に吹き鳴らされます。この2つの場面は両方とも今回我々が演奏しますね。

最も素晴らしく印象的なライトモチーフは、「愛の救済」というちょっと恥ずかしいネーミングのライトモチーフです。『ワルキューレ』3幕前半、ジークリンデが助けてくれたブリュンヒルデにお礼を述べ森に逃げていく場面で流れる極めて美しく印象的なライトモチーフですが、その後全く登場しません。ライトモチーフを縦横無尽に駆使したワーグナーですが、このライトモチーフだけは温存し、『神々の黄昏』の最後の最後に登場します。これが本当に効果的で、バイロイトで『ニーベルングの指環』を体験した2回とも、このライトモチーフで感涙しました。これも今回我々演奏するんですよね、舞台上で涙してしまうかもしれません。

ワーグナーの反ユダヤ主義問題や、イスラエルでワーグナーが演奏できない話題など、まだまだお話したい所もありますが、これくらいにしておこうと思います。